

<その他>

アニマルウェルフェア，大企業，NGO

—ザ・ヒューメイン・リーグ・ジャパン上原まほさんに聞く—

山口 拓 美

はじめに

近年、日本でもSDGs（持続可能な開発目標）やESG（環境・社会・企業統治）投資に対する関心が急速に高まってきたが、環境保全や人権擁護といった領域では元来NGOが大きな役割を果たしてきた。日本の企業も今後これらの課題への対応をますます強く求められるようになり、企業とNGOとの連携もこれまで以上に必要とされるようになると考えられる。しかし、環境問題や社会問題をめぐっては、民間の営利企業とNGOとの関係は敵対する場面が多く報道され、協力関係の側面は一般にはあまり知られていないように思われる。そこで今回は、グローバル企業を中心に多くの大企業と連携しアニマルウェルフェア（動物福祉）を積極的に推進してきたアメリカのNGO、ザ・ヒューメイン・リーグの活動の様子について、日本支部の上原まほさんにお話をお聞きすることとした。

アニマルウェルフェアは気候変動等と比べると日本では注目されることの少ない分野だが、世界的には重要なESG課題の1つとして認識されている。欧州連合（EU）やアメリカの諸州では、畜産業で飼養されている鶏、豚、牛等について、それらの動物に与える苦痛を最小限に抑えるための取扱い基準が法令によって定められている。また、個々の民間企業レベルでも独自のアニマルウェルフェア基準が導入されている。例えばEUは2012年に採卵鶏をバタリーケージ（従来型の最も狭いケージ）で飼養することを禁じ、エンリッチドケージ（止り木や巣箱等を備えた従来型より広いケージ）を最低基準としたが、その後、実際の飼養現場ではケージフリー（鶏をケージに入れない平飼い方式）が進む一方、流通や外食の大手企業の中にはケージフリー卵のみを調達する企業も増えている。また、アメリカでもカリフォルニア州やマサチューセッツ州など7つの州でバタリーケージが禁止されており、スターバックスコーヒーのようにケージフリー卵（平飼い卵）の調達に切り替える企業も増えてきている¹。ザ・ヒューメイン・リーグは

1 上原まほ「世界と日本のアニマルウェルフェア畜産ビジネスの新展開（2）—養鶏産業におけるAW食品ビジネスとイノベーション— 第2回 グローバル食品企業チェーンにおけるFAW養鶏ビジネス」『畜産の研究』第73巻第3号（2019年）178-185ページ。

アメリカでのこうした動きを推進してきた有力な NGO の1つである。

インタビュー

山口 ザ・ヒューメイン・リーグは動物擁護を目的とするアメリカの NGO と聞いていますが、日本ではまだ知らない人も多いかと思いますが、簡単にご紹介していただけませんか。

上原 日本では、ヒューマン・リーグですか、とよく言われることがありますが、人道的なという意味のヒューメイン humane で、ヒューメイン・リーグです。家畜の苦しみを極限まで減らすという活動をしています。家畜の中でも採卵鶏に限定しています。採卵鶏のウェルフェアには断喙や強制換羽など幾つかの問題がありますが、私たちは鶏をケージから解放するケージフリーの活動をしています。

山口 アメリカの慈善団体というとキリスト教をイメージしてしまいましたが、何か思想的な基盤みたいなものはあるのでしょうか。

上原 団体としては無宗教で、宗教色は出していません。バックグラウンドにある考え方は、effective altruism、効果的利他主義です。最大の善をなすこと、世の中にある数の多いものを助けることによって善を拡大していく。1人を救うのと10人を救うのとでは、10人を救う方が社会の中の善は大きくなる。こういう功利主義的な考え方に基づいています。家畜の苦痛を最大限に減らすのが目的ですが、その際、数に注目すると、数が一番多いのが鶏なので、鶏が解放されることによって家畜の苦しみが大きく軽減される。だから鶏なんです。

山口 なるほど。宗教ではなく、功利主義哲学を思想的な基礎としているのですね。

上原 効果的利他主義は『動物の解放』で知られるピーター・シンガーが提唱しています。

山口 分かりました。で、働きかけの対象は一般の消費者ではなく企業なのですね。

上原 そうです。これも効果的利他主義によるもので、一番力のあるパワフルな購買者というのは大企業なのですね。例えばウォルマートにしロイオンにしロコストコにしロサプライチェーンを動かす力がありますので、こうした大企業がケージフリーに変えるということになると、生産現場も一気に変わります。購買力の強さと大きさを見て大企業を対象とすることになりました。

山口 効率的に結果を出すということですね。

上原 そうです。アニマルウェルフェアといっても採卵鶏に特化し，ケージフリーに特化し，しかも大企業に特化する，というのが私たちの活動です。

山口 なるほど。もしよければ，これまでどのような企業に働きかけをしてきたかお話しいただけますか。

上原 日本の企業で卵（鶏卵）を扱っていると思える企業に対し，まず面会の依頼を書面で出しました。主に食品製造企業，外食企業，フードコントラクト企業，ファーストフードチェーン，ホスピタリティ業などをメインにしました。まずは当団体の紹介をした上，なぜ平飼い卵を提唱するか，そして海外の動向，そして海外の動向が日本にどう影響を与えていくかをお伝えしたかったのと，それぞれの企業の鶏卵の調達状況を知りたかったのです。

手紙は代表者に出しました。上層部から手紙への対応の指示が出るであろうと考えたからです。NGO，市民活動の話を書くということが，見えなかった課題に対する知識や対策の手段を知る機会であり，協働することで社会，環境に貢献することができるという点で NGO の使い方を理解されている企業が，面会をしてくださったと思いますが，数的にはまだまだです。ほとんどの企業が現代畜産で卵がどう作られているか，つまり採卵鶏がどのように飼育されているかご存知なく，まずは現在の状況から説明し，アニマルウェルフェア（ファームアニマルウェルフェア FAW，家畜福祉ともいう）という概念，平飼い卵に関する情報をお伝えしてきました。

山口 どうして面会に至る企業が少ないのでしょうか。

上原 企業や社会にとって動物の問題は優先順位が低いと思います。また家畜の飼育を向上するという以前に，そもそも現在の飼育実態が広く周知されていない。ですから，アニマルウェルフェアの概念自体がまだ普及していないと思います。グローバル企業は本社が CSR やサステナビリティの取り組みをしているので，日本の拠点でも取り組んでいるところもあります。日本企業でも社会的に大きな影響力のある企業は環境問題，人権問題など会社全体をあげて取り組んでいる企業もたくさんあります。ただそのような企業でも，FAW には言及がない，全く取り組みがないというのが現状です。

山口 ESG 課題に取り組んでいる企業なら NGO の方々と意見交換することはむしろプラスのイメージになるように思います。アメリカの企業だとそうなんじゃないですか。

上原 アメリカだと比較的にそうですね。

山口 しかし日本の企業は面会までなかなか至らない。

上原 企業が私たちとの面会をすることのベネフィットが見えないのは、問題自体の認識も周知されていないことの上、知っていたとしても取り組みや対策が分からない、それに対応する資源が限られている、また平飼卵に変えるなんて無理難題と考えているのでしょうか。また面会をしたことが不利になるとするなら、株主を意識しているのでしょうか。

山口 アメリカの企業の方こそ株主を意識しているように思いますが、アメリカの企業だと株主を意識してNGOとのやり取りをオープンにする。一方、日本の企業は株主を意識してオープンにしない。ということは、日本の株主は動物保護団体に良くない印象を持っているということでしょうか。

上原 日本の株主もそうですが、社会的に動物愛護団体にはネガティブなイメージがあるのだと思います。こちらの運動の方策、伝え方を変えていく工夫も必要でしょう。

山口 日本の機関投資家というと GPIF（年金積立金管理運用独立行政法人）が思い浮かびますが、あそこはESG投資をしているのですよね。

上原 そうですね。ただESGの中身が問題で、そこにアニマルウェルフェアがどう位置付けられているのか、環境なのか社会問題なのかははっきりしません。SDGsでも、17項目のどこにも関係しているような気もしますが、どこにも明確に含まれていません。SDGsの中にアニマルウェルフェアという項目があると大分促進されるのではないかと思います。

山口 動物愛護というと環境省の管轄ですから、アニマルウェルフェアもやはり環境問題の1つということになりますかね。

上原 動物愛護法というと環境省ですが、畜産業界というと農林水産省になりますので、畜産業界を変えていくという意味では農水でしょうか。ただ私たちは行政との仕事までできる資源がありません。海外では企業が自主的に変わっていくというところで、社会が変わっています。全体を見て方策を決める行政に働きかけるよりも、企業を変えて流れを変えるという方が効率が良いと考えています。

山口 なるほど。で、主にグローバル企業に働きかけてきたということでしたが、成功事例がかなりあるようですので、よければ幾つかご紹介ください。

上原 そうですね、例えば、私どもとの協議の結果、西洋フード・コンパスグループが2025年までにケージフリー卵の調達を100%にするという宣言を出しました。これはザ・ヒューメイン・リーグ・ジャパンとして大きな成果なのですが、日本のケージフリー運動としても大きな前進だと見ております。アメリカでもまずはフードサービスの大手である Sedexo という会社や Aaramark という会社が先陣を切ってケージフリー宣言を出したことでアメリカのケージフリー宣言が現在の勢いに至っています。日本でも同様の傾向が出てくると期待しています。ヒルトンホテル、フォーシーズンズホテル、スターバックスなどもケージフリー宣言を出しています。

山口 大変結構なことですね。一方、日本に本社のある純粋日本企業については、3年前に100社以上回ったということでしたが、反応はあまり良くなかったわけですね。

上原 例えば、あるファミリーレストランの本部に行った時のことですが、調達担当の方と経営権を持っている方々にお会いしましたが、アニマルウェルフェアのことは知識不足なので教えてくださいということでした。ですから、ケージフリーに至る前の、そもそも何でアニマルウェルフェアなのかという話になりました。

山口 で、アニマルウェルフェアのことを説明したわけですね。どのような反応だったのでしょうか。

上原 心情的には賛同しますし、素晴らしいことです、でもすぐにはできません、検討しますという反応でした。もう少し勉強しますというところで終わっています。

山口 じゃあ、そろそろ勉強の成果を見せてもらうのもいいかもしれませんね。

上原 そうですね。継続的に新しい情報を流してあげることは必要だと思います。

山口 アメリカやヨーロッパですと、企業の方々もアニマルウェルフェアと聞けば、それが何のことかくらいは分かっているのでしょうか。

上原 ヨーロッパはそうだと思いますが、アメリカは2013年14年くらいまでは日本と同じような状態だったと聞いています。私がケージフリーの仕事を始めた時、日本は98%がバッテリー

ケージなんですよと言ったら、「いやアメリカだってそうだったから、できるよ。それが3年くらいで変わったんだから、できるよ」と言われました。

山口 アメリカでは、ケージフリー卵は何%くらいですか。

上原 今、17%くらいがケージフリー卵になっています。2025年までにケージフリーにすると宣言している企業が多いので、2025年には50%くらいがケージフリー卵になると予想されています。

山口 ヨーロッパではどうですか。

上原 例えばイギリスでは、バッテリーケージが禁止された2012年からエンリッチドケージ卵が増えていきましたが、その後、大きな企業がケージフリー宣言をしたりなどしてケージフリーが進んで、2018年にはフリーレンジ卵の方が上回っています。

山口 なるほど。その一方で、日本では98%くらいがヨーロッパで禁止されているバッテリーケージで飼われている、と。しかし、日本独自の食文化ということ勘案するとバッテリーケージも必要ではないかという意見もあるようですが。つまり日本では、ご飯に生卵をかけて食べる文化があるが、この場合、卵が清潔でなければならず、卵を清潔にするためには衛生管理の行き届いたバッテリーケージが望ましいということですが。

上原 そういう意見は良く聞かされます。でも、多くのケージフリーの農家さんとお会いしていますが、彼らの卵も生卵として食べられていますし、卵かけご飯のためだけにケージフリーにしている農家さんもいます。ケージ飼育の方だとサルモネラ感染の心配が払拭されるような説明をされることがありますが、感染はケージ飼育でも起こり得ます。温度管理など生産工程で細心の注意が必要ですし、ケージフリーだとサルモネラが多い、ケージ飼育だと少ないというような単純なことではないはず、と考えます。

山口 実は、今日ここに2019年2月6日付の『日本経済新聞』の切り抜きを持ってきておりまして、見出しが「鶏卵輸出量5割増 昨年、最高更新 生食文化広がる」となっております。本文には「訪日客の増加や海外で和食料理店が人気を集めるようになり、鶏卵の生食文化が広まってきた」とありまして、さらに「日本の鶏卵は世界的に見ても衛生基準が厳しく、生や半熟で食することができる。一方、海外の卵はしっかり加熱しなければサルモネラ菌などによる食中毒のリスクが高く加熱処理を前提とするのが一般的だ」と書かれています。これを読むとバッテリー

ケージ方式の日本の衛生管理が世界的にも評価されはじめているように見えますが、どのように思われますか。

上原 日本は卵の洗浄の技術と見た目の美しさを保つ技術が非常に優れていると言われてます。ですから、やはり洗浄というところで安全性が保たれているのであろうと思います。日本の衛生管理が評価されているのは、バッテリーケージなのかケージフリーなのかというところではなくて、洗浄技術が高いという理由もあるでしょう。サルモネラの場合は洗浄後の温度管理、また強制換羽をしているなど、複合的な原因がありますので、バッテリーケージだとサルモネラのリスクが低いという結論を出すのは適切でないと思います。さらにウィンドレス鶏舎の方がサルモネラ陽性率が高いという結果もあります。感染や危機管理の話題の中で、常に気になるのが、卵を産んでくれる採卵鶏の健康を害するような酷い飼育方法に言及し、とことん考えるという姿勢がないことです。

山口 なるほど。やはりそういうことでしょうかね。まあ、輸出量が増えたといっても、香港だけで輸出先の9割超を占めると書かれていますので、何か香港に特有の事情があるのかもしれないね。これが、ヨーロッパへの輸出量が激増しているということになると、かなり衝撃的なニュースになると思いますが。ところで、同じ東アジアでも台湾では産業動物の保護も比較的進んでいるような話を聞きますが、この点は何か情報をお持ちですか。

上原 台湾にはとても賢明な活動をしている動物保護団体があります。その団体が主体になって鶏卵農家さんたちとケージフリー鶏卵協会のようなものを作っていて、そこでケージフリー卵を生産しています。フランスのカルフルはケージフリー宣言をしたんですが、台湾にあるカルフルはそのケージフリー鶏卵協会から卵を仕入れているようです。こういう動きはとても賢いやり方だなと思います。

山口 それは台湾の土着の動物保護団体ですか、それとも欧米の団体の支部みたいなところですか。

上原 台湾の方たちの地元の団体です。欧米の団体のように畜産関係者を批判したりするのではなく、生産者や流通業者や消費者などすべての関係者を取り込んで、みんなで手をつないでやっていこうという運動のスタイルです。やはり欧米とアジアは違うので、日本でもそういう運動の方がうまくいくんじゃないかなと思っています。

山口 なるほど。どうもアニマルウェルフェアに関しては、日本よりも台湾の方が先進国なのか

もしませんね。

上原 私自身、台湾のカルフルを訪問しましたが、CSR担当の女性がおりまして、彼女が会社を動かしたんですね。アニマルウェルフェアは自分の考え方とも一致するということで、彼女が献身的に動いて、CEOを説得し、社長を説得して台湾のカルフルをケージフリーにしました。社会的責任としてカルフルが動物の倫理的扱いをするのは当然で、ケージ飼育をしないことが未来の姿であると信じて推進していました。CSR活動の素晴らしい姿であると思いました。

山口 そういう人を生み出す力が今の台湾社会の中にはあるということですね。私も台湾の状況を調査してきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

(このインタビューは2019年8月6日に行われたものです)